



9 月 号
令和元年9月25日

桜花爛漫

郷土を舞台に 夢に向かい ともに歩む学校

桜花爛漫・飛翔若鷹

ひとり歩きのできる子
～つながる力を育む～

検索 庄川まちづくり協議会

お祭りを支える人たち

校長 水口 悟

水始めて涸れる(秋分 末侯 みずはじめてかれる)

田から水を抜き、稲刈りに取りかかるころ。たわわに実った稲穂の、収穫の秋真っ只中です。(新暦では、およそ十月三日～十月七日ごろ 日本の七十二候を楽しむより)

◇ ひとり歩きできる子の ‘お祭り’



9月始めの2週間、8地域の禮祭に参加させていただきました。準備や練習を含めたこのお祭りの期間は、子どもたちにとって学校では学べない多くのことを学ぶ貴重な時間となっています。地域の大人の方々が一生懸命にお祭りを守り続ける姿にふれ、自分も何か役割を持ち地域の一員として働く機会です。神社の掃除を手伝ったり村芝居を観たり・・・、それで十分。庄川のお祭りの雰囲気浸ることで十分に役立っています。学校教育とは異なるゆっくりとした時間と広い空間の中で、お祭りを楽しみながら、より

よい参加の仕方に気づいたり発見したりすることが大切なのでしょう。舞台の友達の出演が終わると、舞台の袖からなだれ込むようにプレゼントを渡す姿は、とても楽しい！庄川のお祭りのなくてはならない風物詩の一つです。これこそ、子どもたちが見つけ出したお祭りへの参加の仕方なのでしょう。

特に、若連中みなさんの真剣かつユーモア溢れる熱演には、子若連のみんなも「自分も大きくなったら、出演する！」と、強い憧れを抱いています。前日にはしっかり神社の掃除を手伝った子どもの存在、稚児の役に初めて挑戦した子どもの存在、今年も親子で獅子舞を演じた子どもの存在、お父さんの名演技に、思わず声援を送った子どもの存在、他地域から村芝居に挑戦した若者の存在、遠く離れていても禮祭の時には庄川に帰ってくる若者の存在・・・。

少子高齢化の波が押し寄せる中、このすばらしい伝統文化を守り続けていることに頭が下がります。伝統文化とは、お祭り自体ではなく、支え続けている人たちのことを指すのだと実感しています。庄川の伝統文化とは、庄川のまちを支えている人々のあたたかで夢のあるコミュニティーそのものです。宮司さんの「来賓の皆さんが参加することで、各地域のお祭りも引き締まります」というお話がありました。私たち来賓も、そういった側面からお祭りを盛り上げている一員であることも実感しました。

お祭りを回らせていただく中で、「子どもが少なくなった」と寂しげな声を聞いたことも事実です。庄川のお祭りの本質はしっかり伝承しながらも、新しい風を取り入れながらこのすばらしい伝統を柔軟に維持し、次世代に継承していくことが重要なことではないかと、勝手ながらも感じています。



◇ ひとり歩きできる子の ‘山中峠ミズバショウ復活学習’

岐阜大学の教授や学生のみなさんと、「山中峠のミズバショウのこれからをどうする！」の学習を始めて、今年度で4年目となりました。やはり、学びを続けることは大切なことです。新たな発見と知恵を創造し、不可能を可能にする力を育むことになるからです。

今年は、支所のみなさんの連携のもとで、5年生の児童が自ら山中峠のミズバショウの種子を採取する実験を行い、先日は、その種子を大学生の皆さんとプランターに植える学習をしました。庄川の子どものまちのよさを持続可能にするための学習は続いています。教授や大学生のみなさんとのランチタイムも、楽しかった。男子児童2名(子若連)が3年生の時に段ボールで作った獅子頭をいつの間にか持ってきて、突然、獅子舞を披露した姿はとても可愛らしく、みな拍手喝采でした。